

平成 20 年度校内研究の概要

山形市立滝山小学校

I 研究の概要

1. はじめに

人は、生まれながらにして他とのかかわりをもちながら生きている。また、将来にわたって他とのかかわりをもって生きていくものである。わたしたちは、**他とのかかわりをもって生きていくことへの「喜び」「楽しさ」を感じる子ども**たちに育てていきたいと思っている。

確かな学力の定着が求められている今日、わたしたちも教育課程の工夫を通して、一人一人の子どもたちに基礎基本を大切にしながら指導にあたってきた。なかでも意欲的に「授業」に取り組むこと、基本的な知識・技能の定着、学び方を学ぶことを基盤とし、表現力にもスポットをあてながら取り組んできた。しかし、目に見える学力はあるにもかかわらず、それを生かすことができない、十分に発揮することができない子ども、まして大人が増えてきている現状を危惧している。それは、学力というものが「個」にとどまり、自分の内面から外側に向けて十分に発揮されていないからである。つまり、より生きて働く確かな学力を他とのかかわりの中で育てていくことが責務であると考えている。**子どもの内側にある学力が他とのかかわりの中で高められたときに、確かな学力が身に付き、将来にわたって生きる力となっていくと考えている。**

そこで研究テーマを「**他とのかかわりながら確かな学力を育む教育課程の創造**」とし、全教育課程を通じた活動をすべて「授業」ととらえ、それぞれに応じた挑戦したくなるような課題を設定していくとともに、その「授業」において、子どもたちの持つ価値を『**他とのかかわりながら学び続ける**』ことで高め、よりよい、将来にわたって生きて働く確かな学力を育てていくことをめざしてきた。

一方で、子どもたちに確かな学力を育むために、私たち「教師」はどのような「教師」をめざしていくことが必要なのだろうか。まずこれまでの授業を真摯に振り返り、改善していこうとする意志を持つことが必要である。そこで平成17年度までは、子どもたちの実態をしっかりとらえる目を養い、「子どもの育ち」という視点で授業分析に力を入れた。指導案とともに大切にしてきた「個別支援表」を活用し、抽出児童の反応をくわしく観察して語り合う事後研究会などを行ってきた。また、教師自身の振り返りも大切に考え、授業研究会後に「**どんぐり（自身による授業の分析）**」を発行してきた。

また昨年度は、「**単元の本質をとらえること**」を授業づくりの基本とし、魅力ある課題を子どもたちに提示していくようにしていくことが大切であると考え実践してきた。教師は、単元の本質をとらえ、子どもたちのどのような反応に対しても、その真意を理解しようと努めることで、他とのかかわりを支える潤滑油のはたらきをしていった。また、子どもたちの様々な反応のなかにある、目標に迫る真の部分を見つけ出し、紡いでいくことも大切に考えていった。子どもたちは、単元の本質に触れたとき授業の楽しさを味わうのである。単元の本質をとらえるとき、6年間の学びの中でのその単元の持つ意味や位置づけ・他単元との関連を考えることもとても重要になってくる。そこで、それまで学年を中心に行ってきた授業づくりを学年部で行うようにし、より子どもの学びの道すじを深く見取る努力を重ねてきた。授業づくりのチームを学年だけにとどまらないようにしたことで、これまで見えなかった子どもの姿にも気づかされるようになってきている。教師が振り返りを大切に、仲間とともに自分自身の気づきを掘り起こし、実践に生かしていこうとする姿勢をもち続けることは、子どもたちに確かな学力を育む大切な視点であるとあらためて感じた。

そして今年度、昨年度まで積み重ねてきた「協働研究」を深め、滝山小の教師集団が共に高まりあうチームに成熟していきたいと考えている。私たち教師が子どもに求めている姿を、私たち自身の姿としても目指していかなければならないと感じている。それを目指すことは一方で苦勞を伴うものであるが、他方で確かな手ごたえと喜びを与えてくれるものであることを、私たちは実感し始めている。

2. 基本的な方針

昨年度の研究の方針を継続していくとともに、教育課程のねらいを踏まえ、実践を重ねていく。

- 目に見える学力とともに、それを生かす「他とかかわる力」を伸張していく。

他とのかかわりのなかでこそ、将来にわたって生きて働く確かな学力を身に付けることができる。

～表現力に視点をあてて

- 教育課程全体を通じた活動すべてを「授業」と捉え、子どもたちの学びを形成していく。

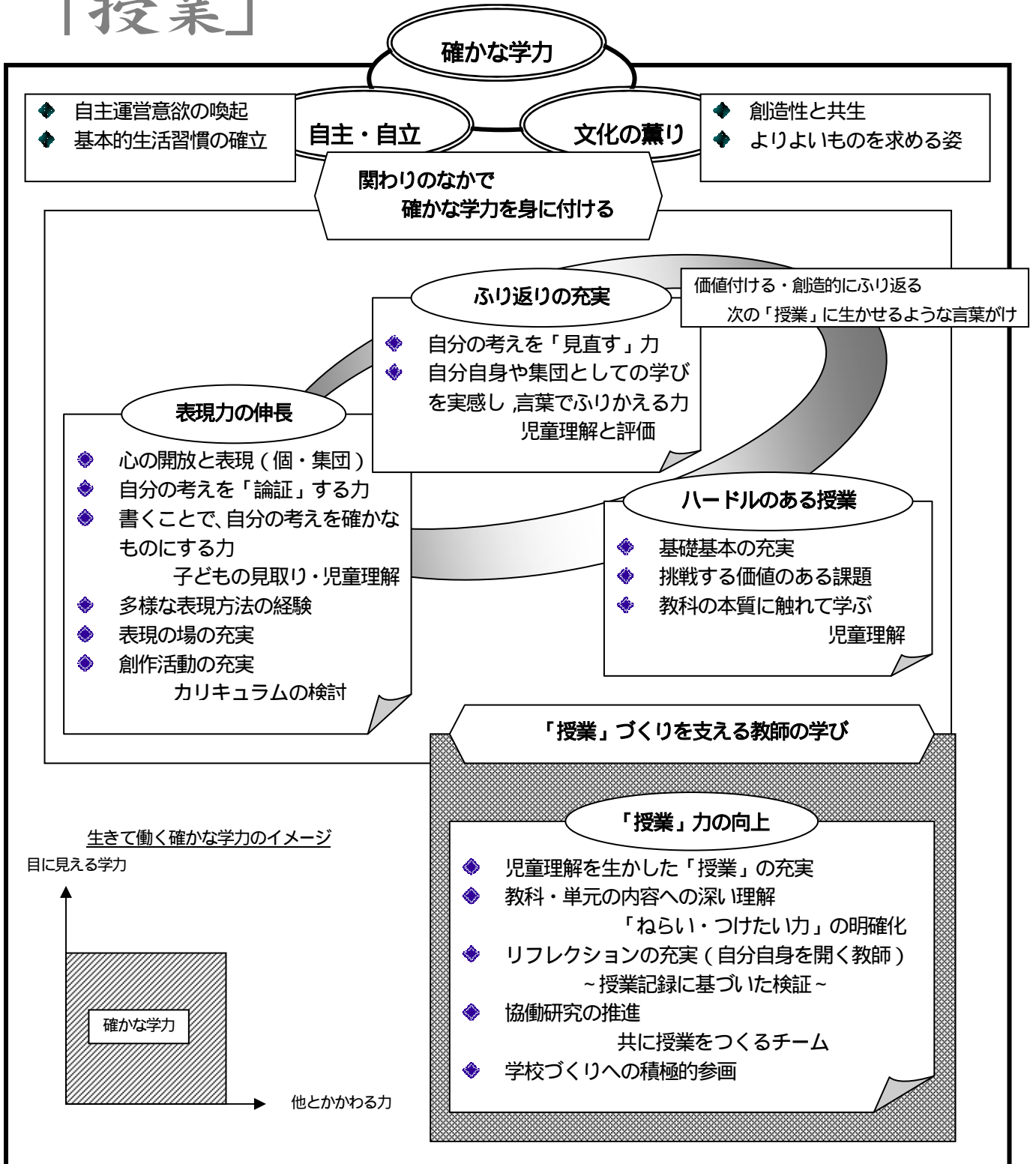
- 「授業」は子ども理解に始まり、子ども理解に終わるという理念のもとに、

子どもたちと「授業」づくりに臨んでいく。

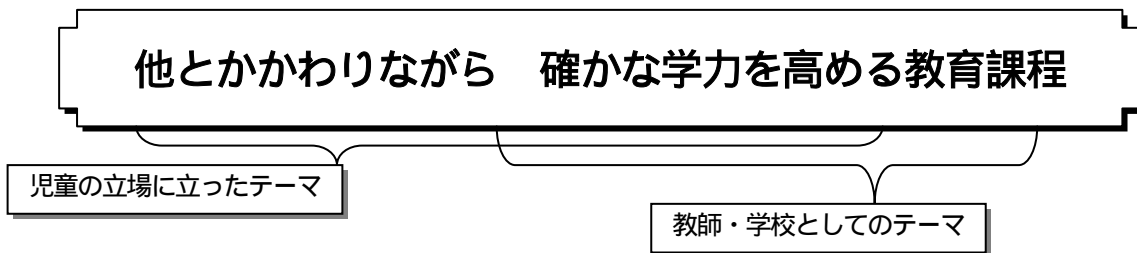
- 「授業」づくりを支える『教師の「授業」力』も視野に入れ、

教師自身が自己を開いてふり返りを大切にし、学び続けていくようにする。

「授業」



3. 研究テーマについて



4. めざす子どもの学びの姿

他とかかわりながら学び続ける子ども

かかわりのなかで確かな学力を育むことで、将来にわたって生きて働く学力を身に付ける子どもを育む

そのために一人一人に求める姿は

- 自分の考えをもち、意志を決定できる子ども
- 心を開いて豊かに表現することができる子ども
- 自分をふり返し、自らの生き方に生かすことができる子ども

自分の考えを持ち、意志を決定できる子ども

他と主体的にかかわる子どもを求めていくうえで、一人一人の子どもが自分なりの考えを持つことは、大前提となってくる。また、その考えがより主体的であり、他とのかかわりの中で選びとったり、自らの考えを確立したりすることで、よりよいものをめざす姿勢も生まれてくると考える。

自立自立へとつながる主体的な意志を持つ子ども

「授業」のなかで、意志を決定するのは子どもであり、われわれ教師は、その決定する材料を子どもとともに構築していかなければならないと考える。

心を開いて豊かに表現できる子ども

自分の思いを表現する方法は多様にある。しかし、そのもととなるものは、自分の心にあることを素直に表現する姿勢である。つまり、心を開いて表現しようとする、心を開きたくなるような集団を形成すること（心を開いて聴く集団であること）が、かかわりの中で学びを構築していく基となる。

そのためには、表現したくなるような言葉をかけること、期待感を持って子どもに対することなどの力量が求められる。また、子どもが相手の話をしっかり受け止めそれを自分事として考えようすると、相手にさらに細かく尋ねようとする。伝えようとする側も、尋ねられることでさらに自分の考えをより確かなものに構築することになる。かかわり合いの中からこそ、より豊かに表現する必要が生まれてくるのである。友だちとつながり合いながら語り合うことを、好ましく感じる児童集団を育てていくことが望まれているのである。

自分をふり返し、自らの生き方に生かすことができる子ども

自らの学びを自らでふり返し価値付けていくことは、成長を明らかにする上でも大切になってくる。また、自尊心を高めるとともにさらに次の「授業」、学びに向かう意欲を喚起することとなる。加えて、次の学びに向かう課題意識を持つことでその学びはさらに大きく確かなものとなっていくと考える。この繰り返しによって、自らの生き方を構築していく基盤を培っていくのではないだろうか。

従って、わたしたち教師は、終わったことを反省したり完結したりするふり返しを求めるのではなく、次の学びへと続く創造的なふり返しを仕組んでいくことが求められてくると考える。

そしてそれは、私たちのリフレクションの中でも、教師自身が同じようにめざしていかなければならないことなのである。

5. 研究の内容・方法について

『本年度の主な研究の内容』

上記のような子どもの姿を求めるためにわたしたちは何をすべきなのか、それは

深く、確かな児童理解に基づいた「授業」づくり

多数の目で児童理解を進め、語り合い、深い追究のなかで、妥当性を求めていく協働性が大切になってくると考える。そこで、

学年を越えた児童理解を推し進め、「授業」づくりを推進することに挑戦していく

☐ 学年部を中心に縦のつながりを大切にした児童理解と「授業」づくり

(国語科・算数科・図画工作科を窓口にして)

教科を絞り、学年の枠組みを越えたチームで子ども理解に基づいた「授業」づくりに臨み、各部ごとに授業提案を行っていく。(全校研・学年部研, 一人一授業)

また、授業リフレクションで児童理解を進めるとともに、教師の「授業」力の向上を図る

授業リフレクションは、詳細な授業記録をもとにした、児童理解を柱に進めるようにする(児童理解と教科の本質)

年間計画をたて、授業研究会を計画的に実施していくように努める

☐ 学級を開く児童理解と「授業」づくり

授業研究会の本時だけでなく、そこに至るまでの道筋を複数の目で見取りながら、事前研を積み重ね児童理解を深めていく。

教科主任を中心に窓口教科以外の教科にも挑戦し、教科部を機能させていく。

☐ 児童による学校づくりの推進(「わたしたちの学校はわたしたちの手でつくる」という意識の向上)

「みんなで創る運動会」の継続・児童会活動の見直しと充実・なかよしツアー2008の実施

4th stage として、どの学年のどの教科の授業においても、子ども理解という視点でしっかりとした授業分析ができる校内研究、教師集団になっていきたいと考えている。

『研究の方法』

☐ 「授業」研究会の実施

全校研(低・中・高学年授業実践部, 図工部各々一授業)・学年部研, 一人一授業

☐ 「授業」を語る会の計画と実施

一昨年度からの実践交流を継続する意味でも、9月30日に、他校の先生方を交え、「授業」を語る会を実施していく。

☐ カリキュラム及び求める子どもの姿の検討(学習指導部と連携しながら)

学校経営概要・各教科の計画への反映と具体的な手立ての検討

☐ 研究会, 研修会への積極的な参加 児童理解を授業に生かしている学校



☐ 新学習指導要領の情報収集と教育課程・実践内容のふりかえり

「習得」「活用」「探究」などの意味と具体

「総合的な学習の時間の章への格上げ」「体育の時間増」

☐ 英語を中心とした外国語活動に関する情報収集と準備・計画 専門部の立ち上げ

すべての活動が「授業」であると意識しています。

教師も子どもも「ふり返り」を大切に考えています。

「授業」は子どものものという意識をもっています。

子どもも教師も、共感的に「聴く」ことを大切にしています。

教師も子どもも、日常的な言語環境に気をつけています。

子どもの姿から学んでいます。

「授業」は、子ども理解に始まり、子ども理解に終わると考えています。

教師も常になろう、前進しようとしています。

子どもも教師も、自分たちでつくりたい授業像を共に考えようとしています。

日々、このページに書かれている項目を増やしていくことも大切だと考えています。

7 授業リフレクションについて

「授業リフレクション」とは、自分の授業への振り返りを取り入れた授業研究の総称である。

本校では、授業者や対話者を中心に、共に「授業」をつくった仲間と、「授業」の真の部分語り合う事後研究会として取り組んでいる。

基本的な流れは、授業者が自分の行った授業をビデオ記録や授業記録をもとに対話者（司会者）と共にふり返し、その内容を話し合い、分析してみることである。授業者は、「授業をつくるうえでの苦労や悩み、このように考えてみたんだけど。」といったものについても積極的に表出していくことで、参会者も授業者のこれまで見えなかった意図を共有することができるようにしていく。参会者は、何となく「よかった。さすがだ。（一生懸命やったんだから）」と一切突っ込まない言い方はせず、自分のことは棚に上げてどんどん話す。それに対して授業者は、攻撃を受けているかのように思わず、言われたことを「子ども理解を深め、教科にも詳しくなる。」と受け止める姿勢へ変えていくことが必要である。このようなスタンスで話し合うことによって、授業者と参観者が「相手も自分も高まる」という共感的な立場に立ち、授業力を向上させることになる。

「授業リフレクション」の主な手順

授業者は、本時のあとに、実際の授業の中で「自分は何をどのように見て、どのように解釈し、判断し、行動したか」をふり返し、表面的なふり返しにならないように、自分の内面に注意を向けて報告する。また、授業の場面以外の学級の様子についても話題を出していくようにする。

対話者は、授業者のふり返しを助けるように質問を投げかけたり、共にふり返しをしたりしていく。実際の子どものようすや、授業づくりに関わった視点から、研究会を進めていくように心がける。

参会者は、授業中に「見たこと・感じたこと・気づいたこと」についての情報を提供するようにする。論点に沿って話を出していくことが大切になってくる。

話し合いは、授業者の報告をもとに、授業者・対話者・参会者がそれぞれの角度から「見たこと・感じたこと・気づいたこと」など子どもの行動の事実や情報について提供し、視点に沿って考察する。

記録者は、視点に沿って今話し合われていることを大判用紙に記録し、話し合いのポイントが見えるようにする。

授業者は、話し合いの最後に「この話し合いで見えてきたこと・気づくことができたこと」を自分の言葉で述べる。

授業の振り返りは、授業中の事実・事後研究会で話し合われた内容を中心に、授業者が「どんぐり（視点を掲げた振り返りシート）」としてまとめ、全員に配布する。

「授業」を参観するときに

個別支援表に目を通し、その子のこれまでの学習の道すじや学びの履歴を把握する。

・指導案と合わせて見ることによって、気になる子や、本時の「この子の学びを追ってみたい。」と感じるような子を探してみる。

・「今日はこの子からいきたい。こんな場面でこの子を生かしていきたい。」というような児童名入りの本時案が当日出されるので、その子にも着目してみる。

本時の授業の中での子どもの事実（発言・行動・つぶやき・表情・他の子や授業者との関わり方など）を、つぶさに記録する。

・あらかじめ着目しようと考えていた子や、本時で気にかかった子を中心に、なぜそのような姿を見せたのか考えながら参観し、記録していく。

「授業リフレクション」に参加するときに

自分が見取った「子どもの事実」を、児童名を出しながら具体的に報告する。

なぜそのような姿になったと思うのか、自分なりの見取りを述べ合う。

「私はあの子のつぶやきをこう見たよ。」「あの子は、さんの発言を聞いてこう変わっていった。」

「さんは、先生のこんな支援でこんな考えをすることができるようになったと思った。」

授業者も参観者も「子ども理解・教材理解が深まる」「相手も自分も高まる」と感じられるように、共感的な立場に立って、どんどん話す。

「こうすればこうなっていたのではないか。」「ここが教師の出どころだったのでは。」など、授業者がねらっていた意図をくみ取りつつ、授業者が気づけなかったことにも気づかせてあげられるような話をしていく。